

「ティアアおかえり！」

玄関の扉を開け、誰もいないはずの室内に入ったティアアを出迎えたのは、スバルのこれでもかというくらいに満面の笑顔だった。

「ご飯にする？ お風呂にする？ それとも……あ・た・し？」

今にも抱きつかんと身を乗り出してくるスバル。

その指先がティアアナの肩に触れようかという寸前で、ティアアナは無表情に答えを返した。

「スバルがいい」

「……え？」

スバルの動きが固まる。

「なにをバカみたいな顔してるのよ」

「え？ あ、あれ？」

狐につままれたような、というのはいくつかの顔を言うんだろうな、とティアアナは笑顔と驚愕の中間のような、そんな微妙な表情を浮かべるスバルを眺めて思った。

「えっと、あの、ティアア？」

数秒ほどの間を置いて、ようやくといった様子でスバルがやや上目遣いにティアアナを見つめ返す。

「あー、えーと、ご飯にする？ お風呂にする？ それとも……」

「だからスバルがいいって言うてるでしょ」

上から覗き込むようにして、ティアアナがスバルに顔を寄せる。

「あれ？ いや、あの、そこはほら、もっとうティアアっぽく、怒るとか、叩くとか、あきれるとか」

「あたしっぽくってなによ、あたしはあたしよ」

ふん、とティアアナはスバルの背中を抱くようにして引き寄せると、その唇に自身の唇を重ねた。

「んん……っ！」

スバルは驚いたように一度大きく目を開いたが、すぐにそのまま自らの両腕をティアアナの首筋に回して臉を閉じる

「ん……んっ」

「ん、ふ……ふあ、ん……スバル……」

「ティアア……んっ……」

一度わずかに身を離して互いの名前を呼んだあと、再びむさぼりつくように二人は相手の身体を強く抱き寄せた。

「ん、あ、ああ……んっ」

「ん、んん……あ、ふ……く、ん」

絡まる舌を通して伝わってくる体温と息づかいを感じながら、まるでお互いの存在を確かめ合うように、ティアアナとスバルは長い長いキスを交わす。

「ああ……ん……ん……」

と、かすかに震えていたスバルの膝が、まるで全身の力

が抜けてしまったかのようにくずおれた。

「……っ」と

両腕を伸ばして、ティアナがスバルの身体を抱え込む。

「もう、ティア、いきなりひどいよ……」

荒くなった呼吸をなんとか整えながら、口元をぬぐって

スバルがティアナを見上げる。

「スバルが先に言い出したんじゃない。ご飯か、お風呂か、スバルかって」

「だからって、不意打ちであんなにされたら、その……」

言いかけて、スバルの頬が朱く染まる。

「嫌なら最初から言わなきゃいいじゃない」

「い、嫌じゃないよ！ 嫌じゃないけど、さ」

口ごもるスバルの腰を支えながらその場に座らせると、

その正面にかがみこんで、ティアナがスバルに笑いかける。

「それに、今日は、お祝いにきてくれたんでしょ？ たし

かに頂いたわよ」

その言葉に、スバルがはっとして顔を上げる。

「え、じゃあー！」

ティアナはスカートのポケットに手を入れると、親指ほ

どの大きさのバッジを取り出してスバルに見せた。

「執務官証。これであたしも、今日から時空管理局の執務

官よ」

そう言って照れくさそうに微笑むティアナに、

「ティア！ おめでとう！ ティアー！」

「わ、ちよっとスバル！」

今度こそとばかりに、文字通り身体ごと飛び込むように

してスバルはティアナに抱きついてきた。

「ティアー！」

「ちよ、こら、嗅ぐな！ 頬ずりするな！ 揉むなあー！

バカスバルー！」

「ふあ、あ」

「もう、ティアってば、本局に来てるんだからもう少ししゃ

きっとしないと」

「んー……わかってるんだけど、眠くて……」

「そりや、夕べあれだけ頑張ったら、ね」

「あ、あれはスバルが……って余計こと言うな！」

ティアナの平手がスバルの後頭部を叩く。

「痛っ！ 痛いよティアー！」

「叩かれるようなことを言うからよ」

まったく、と鼻を鳴らして、ティアナはやや歩調を速め

た。

時空管理局本局。

昨日、正式に執務官としての任命を受けた際、早速だが、

とティアナは上司から指示を受けていた。

本局の捜査部から、直接指名で呼びだしがあるとの言葉